

實川風&實川飛鳥

「心を揺さぶる演奏で感動と力を届けたい」



千葉県旭市出身で兄妹ともに国際コンクールで多数受賞。千葉県東総文化会館では、お二人でピアノの弾き比べコンサートに出演するなど、当財団ともかかわりの深い風さん・飛鳥さんに、演奏活動に対する想いを伺いました。

—お二人がピアノを始めたきっかけは？

風 父がクラシック音楽を大好きだった影響で、3歳から藝大出身の先生の教えを受けました。4歳でコンクールに出場することになり、たくさん練習していくうちに親の方が本気のスイッチが入ったようで、5歳の時にグランドピアノを用意してくれたんです。今思うとけっこう思いきった決断ですね。

飛鳥 私も同じように3歳からピアノを習いました。親に強制されたわけではありませんが「やるのが当たり前」みたいな空気があり、自然な流れで始めたように記憶しています。

—幼い頃にピアノの練習が嫌になったことはありませんか？

風 気づけばピアノの練習は生活習慣のようなものになっていて、よその子ども平日は家に帰ったらピアノを弾いているものだと思っていたようです。

—飛鳥さんはひと足先にピアノを習い始めたお兄さんの背中をどのように見ていましたか？

飛鳥 一番古い記憶として覚えているのは、私が6歳の時、小学2年生の兄が全国大会のコンクールで銀賞を受賞したことです。兄に授与されたメダルがうらやましくて泣き喚いていたようです。

風 その逆もありましたよ。何歳の時か忘れたけど、妹がコンクールの予選を通過して賞を頂いたのに僕が何ももらえなくて、「いいな」と悔しい思いをした記憶があります。

—ピアノのどんなところに魅力を感じましたか？

風 スポーツ感覚に近いのですが、難しい曲を練習してどんどん弾けるようになることに喜びを感じていました。小学5年生の時には、先輩が弾いていたショパンのスケルツォ第2番を聴いて「この曲弾きたいな」と思い、さすがに弾くことはできませんでしたが譜読みを頑張りました。

飛鳥：小学6年生の時にコンクールでモーツァルトとベートーヴェンが課題に出て、特に好きではないモーツァルトを先生の勧めで弾くことになりました。最初はその選択に納得いかず嫌々練習していたのですが、勉強するうちにモーツァルトの音楽の良さがどんどん分かっていき、東京大会で1位を頂くことができました。それ以来、モーツァルトは私にとって一番身近に感じる作曲家です。

——これまで師事した先生から受けた指導の中で、特に印象深いことはありますか？

風 小学生の頃、ショパンコンクール優勝者のダン・タイ・ソン先生が日本にいらっしゃるたびに練習を見ていたのですが、先生の弾いたピアノから出る音が同じ楽器とは思えないほど音色が美しく「なんであんな綺麗な音が出せるんだらう」と憧れました。それでいてすごく優しい人柄の方で、緊張しつつとても楽しかったですね。

飛鳥 私も兄と同じ先生に習い続けてきて、ダン・タイ・ソン先生にも教えていただきました。通訳の方を通じてご指導いただいたのですが、なんだか異国の魔法を掛けられられているような感覚になり、音よりも語り口が印象に残っています。

風 他にも多くの先生に教わり、ドイツに20年以上住まれていた多美智子先生（おおのみちこ。東京藝術大学名誉教授）からはヨーロッパの伝統的な音楽性を細かく噛み砕いて教えていただき、その次に付いた江口玲先生（東京藝術大学教授）はアメリカで20年以上指導されていた方で、自分の意見を音楽で表現する大切さを教えていただきました。それぞれまったく異なる教えに戸惑った時期もありましたが、いろんな先生に付いたおかげで総合的に自らの演奏を高めていくことができたと思います。

——これまででピアニストとしてターニングポイントになった出来事は？

風 高校生まではコンクールや日々のレッスンをこなしている状態で、演奏活動について意識したことはありませんでした。その意識が変化したのは大学生になってからです。コンクール受賞者の演奏会に参加させていただいた際に、演奏会は会場へ来ていただいたお客さんとの心の交流が生まれる場であることに気づき、そうしたモードでピアノを弾けるようになったんです。そして、2015年にロン・ティボー・クレスパン国際コンクールで第3位を受賞したことを境に、オーケストラとの共演や全国各地での演奏会の依頼が一気に増え、ピアニストとして演奏活動していくペースをつかめるようになりました。

飛鳥 私はコンクールで1位を頂いたり入賞したり、演奏会で演奏を聴いていただくようになってからも、ピアノを弾くことへの気持ちが変わったり確信が深まるということはありませんでした。そんな中、2018年に障がい者就労施設で演奏させていただく機会があり、私自身が大好きな作品を演奏したところ、演奏に感動した方から「今日まで生きてて良かったです」と泣きながら声を掛けていただいたんです。その瞬間、心を射抜かれたような気持ちになりました。クラシック音楽のピアノ楽曲は何人もピアニストが同じ曲を弾くという特殊な形態で、その中で自分が弾かなければいけない理由をずっと見つけられずにいたんです。でもこの体験をきっかけに、「たとえたった一人でも、このような想いを抱く方がいてくださることが、私の演奏する理由だ」と思えるようになりました。



——お二人が普段の演奏で心がけていることは？

風 それぞれ日常がある中で演奏会という特別な場に足を運んでくださる皆さんに、普段なかなか味わえないようなエネルギーを受け取って「明日から頑張ろう」と軽い足取りで帰っていただきたいと願っています。そのようにお客さんの心を動かすには、曲の持つパワーやメッセージを代弁しつつ、自分が全力を出し切ってパワーを注ぐ必要があり、リサイタルで2時間も一人で演奏すると大変ですね。本番の日は1日に4、5食は食べています。

飛鳥 人によっては演奏会で初めて聴く曲があり、しかもその場になかったら一生聴く機会がなかったかもしれないことがあると思うんです。「こんな曲があるんだ」とその人の頭に残り、そして人生の中に残っていくというのは、とても特別なことですよね。そうした音楽を通じた一期一会を大切にしたいと思っています。もちろんお客さんが知っている曲でも「今日聴いてこんな気持ちになった」という感動を体験し、ホールを後にしていただけると嬉しいですね。

—お二人は千葉県旭市のご出身で、これまで何度も千葉での公演を経験していますが、やはり地元での演奏は他とは違った気持ちになりますか？

風 千葉は大好きなので、やっぱりホッとします。なかでも東総文化会館が実家から近くにあり、子どもの頃には市民が参加するグリーンコンサートで毎年演奏したり、コンクール前の練習で何度も通ったり、とても思い出深い場所なんです。今でも演奏会を開くと小学校の先生など地元の顔馴染みがたくさん聴きに来てくださいます。それ以外の会場でも、千葉県内での演奏会はホームグラウンドという感覚ですね。

飛鳥 客席にいるのは私たちがよく知っている方が多く、気難しい感じでクラシック音楽を聴くという雰囲気ではなく、とても打ち解けた気分で演奏できます。

一方、千葉は東京に比べて演奏会が少なく、お客さんもクラシック音楽のファンばかりではないと思います。そうした方たちに私の演奏を通じて「これからもクラシック音楽を聴きたい」と興味を持っていただけるような時間を作りたいです。



—今後の目標があればお聞かせください。

風 昨今、心がざわつくような事件が続いて落ち込む時期もあったのですが、バッハの音楽と向き合うことで安らぎを得ることができました。僕のように嫌な気持ちを抑えたり抱えたまま過ごしている方たちにも同じような安らぎを感じていただけるよう、バッハの音楽が持つパワーを自分の演奏を通じて届けていきたいと思います。あと、東総文化会館で毎年「知って！感じて！ホールのピアノ」というホールのピアノを弾き比べできる公開レッスンを私たちがやらせていただいているので、これからも続けていきたいですね。

飛鳥 2024年はフォーレの没後100年にあたります。フォーレはドビュッシーやラベルなど同時期のフランスの作曲家と比べてあまり演奏される機会がありませんが、宝物のような曲をたくさん残しているので、積極的に演奏してお客さんに触れたいですね。また、6月に市原市市民会館で開催される「若い芽のαコンサート」にも出演しますので、ぜひ聴きにいらしてください。

聞き手：橋本志世（公益財団法人千葉県文化振興財団）
写 真：七海麻子

●プロフィール

實川風（じつかわかおる）

東京藝術大学を首席で卒業、同大学大学院（修士課程）修了。2015年にロン・ティボー・クレスパン国際コンクール第3位（1位なし）、2016年にカラーリョ国際ピアノコンクール第1位・聴衆賞を受賞。若手を代表するピアニストの一人として国内外で活動を展開している。

實川飛鳥（じつかわあすか）

東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程を経て、グラーツ国立音楽大学修士課程を最高点で修了。2012年に第2回ハノイ国際ピノコンクール第1位、2016年にマルタ・ディベリコンクールピアノ部門第1位のほか、3つの国際コンクールにおいて上位入賞を果たす。